

丹波市人権・同和教育協議会

人権ネットワーク たんば

第40号

発行 丹波市人権・同和教育協議会
〒669-3309
事務局 丹波市柏原町柏原3619
TEL・FAX 0795-72-2770
e-mail jinken@tambashi-doukyou.jp

2018年度

丹波市人権・同和教育協議会 総会開催

会長に大西 誠さん、
副会長に内田順子さん、中道知代子さん

大西会長のあいさつ

今年度の丹波市同教は、「市民みんなが幸せに暮らせるまちづくりや、人権文化があふれる地域づくりをめざして、人権教育・啓発の推進に努める。」という基本方針を掲げています。

研修テーマは、「多様性尊重社会の実現をめざす」であります。

この「多様性尊重社会の実現」を阻害する意識に、「ミソジニー」という潜在意識、「見下し」意識があると私は考えています。

※(女性や女らしさに対する嫌悪や蔑視のこと)



ミソジニーの対極にある「敬愛」の意識は、人権教育に取り組む者の原則にも相通じています。その原則とは、「差別文化の中で育ってきた自分自身の差別的な価値観、思考傾向を問い直し、自分の立ち位置を確認すること」です。

役員及び本年度活動方針決まる

来賓として、鬼頭哲也丹波市副市長、細見正敏丹波市教育委員会教育部長、溝畑 賢丹波地区同教副会長にご臨席いただき、議長は市島中学校長の梅田俊幸さんにお世話になりました。

鬼頭副市長のあいさつ

今年は、世界人権宣言が採択されてから70周年を迎える節目の年です。

人権は、誰もが生まれながらに等しく持っている権利であるという人権尊重の理念は、皆様方のご尽力によって広く浸透してきていますが、今なお差別やインターネット等による人権侵害、学校におけるいじめ、様々なハラスメント、子どもの命が奪われる事件などが発生しております。

こういった事案をなくすためには、一人ひとりが人権侵害や差別を許さ



ないという強い認識を持ち、また、人の立場に立って行動することが重要だと思います。

丹波市としては、人権教育、

人権啓発を通じて、人権が尊重される社会の実現に向けて取り組んでいきますので、今後ともご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

総会では、活動方針と予算が承認され、これに基づいて今年度の取り組みを進めることになりました。

総会 研修会

演題「世界で学んだ、人と『対等』にあるたった一つの方法」

現在、空き家など地域資源の活用による移住促進とまちづくりを行う一般社団法人Beの代表理事として活躍中の中川ミミさん(青垣町在住)に、研修会で講演していただきました。講演内容の要旨を紹介します。

講師
中川 ミミさん



私はエチオピアで生まれ青垣町で大きくなりました。30年前、私の周りには外国籍の人は居なく、学校に行けば友達日本人ばかりでした。家には、エチオピア人の母と日本人の父がいて、食事やお弁当の中身が人と違ったり、他の子と髪型が違い「どうして、みんなと同じようにしてくれへんの?」と思う時期もありました。エチオピアには、現在電気・水道・ガスが通ってない大草原で藁のお家に住んでいる親戚が居て、かたや日本は電気があり、リモコンですぐエアコンがつき、ペットボトルで水を汲みに行かなくても水はあるという事が存在するのを見てきました。私達とは違う現実が色んな所であるということを感じていました。この様な環境だったので別の視点からみるという事ができたと思います。

私が多文化共生と考えるきっかけになった3つのターニングポイントをご紹介します。

◆1つ目のターニングポイント(8歳)

青垣で暮らしている時は日本人の友達ばかりで「どこから来たの?」と聞かれる間もなく「外国人だよ」という前提で対応されていたのです。だから私は「日本人じゃないんだな」と思っていました。

でも、エチオピアに行った時に「どこから来たの?」と聞かれたのです。すごくショックでした。日本にいる時は日本人じゃないと言われていたのに、エチオピア人でもないんだと寂しかった事を覚えています。

私が初めてアイデンティティ、自分が何者かと考えるきっかけになりました。

夏休みを延長させてもらって長い間エチオピアに居ました。両親と一緒に道を渡っていた時、私と目の高さが同じ女の子が袖を引っ張って何かを言ってきました。言葉が分からなかったのですが、手を

出してきたので「お金ちょうだい。ご飯ちょうだい。」と言っているのだと思いました。私が「えっ」と思い両親に「どうして、この子は学校に行っていないの?」と聞いたのです。世の中に同じ国で同じタイミングで生まれた女の子二人がこんなに違う事になっているのかと思う違和感。この違和感が国際協力隊を考えるきっかけになりました。

◆2つ目のターニングポイント(18歳)

国際協力の道に進む為、カルフォルニア州立大学に進学します。

日本なら「日本語は通じるだろう」と判断して話しますが、アメリカは違いました。この人はスペイン系かもしれない、英語圏かもしれない。全然違う言葉かもしれない。その人の背後にどういう人生があるかも分からない。在学中、そういうなかで一度話してみないと分からない状態に置かれた時に、人に伝えたいと思う気持ちと的確に伝えるツールを持つ必要性を感じました。心の中で対等と思っても、表せなかったら相手がそう思わないかもしれないという事に気がきました。

卒業後は、夢を叶えましてHabitat for Humanityという国際協力NGOに就職します。アメリカを発祥とする住宅の建設と修繕をすることで、まちづくり・地域開発を行う国際協力の団体です。私は、ここで「人が人らしく生きる為の住まい」を学び10年間活動しました。

◆3つ目のターニングポイント(30歳)

色々なチャンスを団体から与えて貰えるようになりました。PR・広報・紹介等の活動をする新規事業部のマネージャーを任せられます。私は日本支部で働いていたのですが、各国との調整役をするように

なります。年に何回か国際会議があり、そこで、培ってきたコミュニケーション力が活かされたと思います。

私にとっては、その時々誰かと会って話をするという事と、また一年後に会ったらお互い状況が変わったりしていることもあるけれど、その瞬間、その人の「ありのまま」に何も加えず何も引かず、向き合う事が世界で学んだ、人と「対等」にあるたった一つの方法だと思いました。私自身が誰だという事が分かっていないといけないう、変化するとしても自分を振り返ることが出来ない、どうしても自分の思い込みが相手を変化させてしまうのではと、私は学びました。

もし、何かの参考にして頂けたらと思ってお話しさせていただきました。ありがとうございました。

人も物も情報もすべてのものが世界を行き交うグローバル化はどんどん進み、いまやここ丹波市でも外国人登録者が約800名程となり、今後さらに増えてくると予想されます。中川さんの講演は、外国人も同じ地域住民として互いに認め合い、共に地域づくりをしていくという多文化共生社会の実現を目指して、丹波市の住民として何が出来るか、何をしなければならぬかを考えるきっかけとなりました。

